

福島県桧枝岐村 レポート

はじめに

将来、特別区の地域課やまちづくり課で働きたいと考えており、まちづくりの社会学という観点から色んな土地の行政の観光課やまちづくり課、それからその周辺の課にお話を伺う機会を以前から欲しいと思っていた。東京都の中でも都心3区という特異な性質を持つ場所でのまちづくりを考えるための力を身につけたく、敢えて人口約500人、村の面積の9割を林野が占めるという都心とは真逆の環境である桧枝岐村を対象にどのような地域政策が行われているのか調査を行った。

I. 調査方法

8月20日から23日の4日間に渡り下記の授業内で扱った「参与観察法」という調査方法を基に行った。初日に桧枝岐村役場の住民課の平野さん、観光課の矢吹さんにお話を伺いそのとき話に出てきた村の人や施設にアポを取りいろいろな施設や人を訪れた。

二日目はミニ尾瀬公園と民俗資料館を訪れ、3日目は公民館と尾瀬の郷交流センターに向かいお話を伺った。

また、住民の方と役場の考えにギャップが生じていないかということに注目しながら調査を行った。

II. インタビュー結果

【1日目 桧枝岐村役場 平野さん 矢吹さん】

お二方は桧枝岐村での生活と歴史の概要をお話してくださった。この土地は平地がほとんど存在せず、標高が930mほどもあるため年間を通して昔から気温が低く稲作には向かない土地であり、アワやヒエ、ソバなどの雑穀を作る傍らで曲げわっぱや杓子など制作をはじめとする木工業をメインに暮らしてきた歴史があり、ほかに生計を立てる策はサンショウウオを市場に売りに出していくことのみで、細々とした生活をせざるを得なかったようだ。その後1950年代半ばに桧枝岐村と新潟の魚沼に跨る一級河川の上流に「奥只見ダム」という発電用のダムが建設された。その際、大規模償却資産税という税金がありそのおかげで色んな事が可能になり、昭和48年頃に尾瀬が観光地として化していたことに目をつけて役場が主導し村内に民宿を増やしていく計画がスタート。その後ピーク時には50軒の民宿が立ち並ぶこととなった。この村役場が主導になって村全体を観光地にしていった出来事が桧枝岐村における「平等性」のベースにある出来事であるとしていた。これはお客さんを取り合うことなく、村全体の利益を考えて観光地としての桧枝岐村を考えていくという平等性である。この村主導の民宿計画が大きな騒動に発展することなくスムーズに進んできた背景として、そもそも村が稼げる環境にはなかったが子供や老人、障害者などの働くことのできない人は村の人口の半分を占めていたことがあるという。そうすると

もう半分の人間でその人たちを含めた自分たちの生活を確立しなければならないため、少なくとも1次産業よりは稼げるという確信のもとで成り立ったというのがあるようだ。読みが当たり尾瀬の観光客数は平成8年のときに64万にもなった。その時の桧枝岐村の利用者数が1000行かないほどらしく桧枝岐村のキャパシティがどれほど小さいかがわかる。

また、最近移住者の歓迎にも力を入れているようだが村の面積の94パーセントが国有林、つまり国のものらしい。明治時代、文明開化などで国に資金が少なくなっていた時に地租改正が行われ山が使えず山菜を取ることや木を伐採してお金を稼ぐこともできなくなり貧しい生活を強いられた時代がこの村に「土地を他所の人間に渡さない」という強い気持ちが存在することとなった原因であり、今でも移住者を受け入れようというのが村民の中にはあまりないと感じているようだ。また移住者が増えない原因としてもうひとつ、不動産屋が無いということを挙げていた。そのため仮に住みたいと思っても誰を頼っていいのかわからないということが生じるようだ。

それから昔は「土地を他所の人間に渡さない」という考えは移住者のみならず企業を相手にも持っていたようだが、今はただ単に企業側の利益が上がらないため店舗設置をしないとのこと。移住を促す背景は様々あるが、そんな役場の考えとは裏腹に村民は村の地を残そうと考えている人が多いと矢吹さんはおっしゃった。

桧枝岐村において一番観光客を集める日が桧枝岐歌舞伎の上演日である。この桧枝岐で行われる歌舞伎の一番の特徴は女性が参加することである。しかし観光課の平野さんは歌舞伎を観光の資源にすることに積極的というわけではないそうで、あくまで神事のため座員の人の気持ちを汲み取り集客数はあまり気にしないらしい。頻繁に公演を行わないことも桧枝岐歌舞伎の価値を維持するために必要なことと考えているようだ。

【三日目 尾瀬の宿「こまどり」宿主 星さん】

初日に聞いた内容を基に同じ内容の質問を星さんにも投げた。初日に聞いた通り民宿を村全体でやるようになったのは昭和47,8年ごろのようでそれ以前は木工業のほかに道路の作業現場をはじめとした「ドカタ」の仕事が多かったようだ。40年代後半に出来た民宿が今も続いている、という民宿はないそうで星さんのご両親が経営していた「やましろや」という民宿も現在は駐車場になっているようだ。代々続けていくのが難しい要因として夫婦二人で経営するには十分だが、子供が生まれて育てながら経営を続けるには儲けが少なく経営の質も下がるリスクが大きいのだろう、と推測されており辞める理由は皆高齢化に帰するようだ。

また観光資源としての桧枝岐歌舞伎についてもお話して下さった。星さんは今の観光を「どこにもない」「ここがはじめて」など珍しさ、唯一無二性、新しいものがより一層求められるようになってきたと話す。その典型例はディズニーランドであり、イベントに合わせて変えられる園内装飾と内容の変わるパレード、期間限定の味が用意されたフードメ

ニュー、短いスパンで新作が出るカチューシャとお土産があるから行くたびに変化が生まれている。それと対照的なのが京都である。京都は修学旅行に必ずと言っていいほど組み込まれる学習を目的にした旅行の定番の地である。それはそうした修学旅行客という一定の固定客がいるのはもちろん、大人になってからも訪れてリピートする人は少なくない。京都はディズニーランドと異なり行くたびに変化の大きい場所では決してないが、京都には歴史という大きな武器がある。歴史は義務教育の期間、度々触れることになり織田や豊臣をはじめとする戦国時代の武将の名前は少なくとも一人は日本中皆聞いたことがあるはずだ。しかし、受験勉強のように細々したことまで覚えるとなると多くの人にとっては大変難しい。すると、1度目の旅行で得た知識は2度目に行くまでの期間で忘れられ、2度目訪れた際に新しい知識として得られる。そうした知的好奇心は多かれ少なかれ誰しもが持っているものであり、そのため学習の場として選ばれるような地は下火になりにくい。常に変化や新しさがある、もしくは忘れられやすい知識を提供することのできる場でなければ下火になりやすく、多くの地方に存在する寂れた遊園地やリゾート施設は「見る」ということが想定されて作られたにも関わらず新しさがないアミューズメント施設なのだという。そう考えている星さんは今の桜枝岐歌舞伎の在り方に思うところがあるようで、観光資源としての歌舞伎の価値は「そこらへん歩いてあるもんじゃないから」という考えがあつてこそであるため、村役場が宣伝するようになり観光客が多くなったことに対して対応するお客さんの数も増えることから渋い顔をなさっていた。

また、役場の方たちは国有林に関する一連の出来事が移住者を迎えたがらない要因であるとおっしゃっていたが、星さんは税金を払わなかったりもともとあったコミュニティの輪を乱したりする人の存在がバブルの時代に多かったからだとおっしゃっていた。また他の要因として村が空き家や空き地を積極的に買い取ってしまうことの多さも挙げていた。将来的になにか大きな計画を実行するときに自分たち役場の土地にしてしまえば住民に反対され「ここは動かない」ということが起こらずスムーズに事が運ぶという大きなメリットが村側にはあるのだという。

V. 考察と感想

以上お三方の桜枝岐村の歴史に関する認識にズレはなかったが、ところどころ桜枝岐歌舞伎のことや移住者についてのことで認識に溝が感じられるところがあった。まず桜枝岐村歌舞伎については積極的に観光資源としてアピールしたいわけではないというところは同じであつたが少なくとも村民の一人の星さんの発言からは「役場は桜枝岐歌舞伎を観光資源として積極的にプロモーションしているではないか」という考えが推察できる。積極的に広報するつもりがなくとも村の人にはプロモーションする気があるというふうに認識されており、それによって自分の経営状態に不安をもっているようであつたため他の桜枝岐村住民の方にももう少しお話が聞ければ良かったように思う。

また、移住のことについても役場は「村の方が移住者を受け入れてくれない」と話していたが村の方からは「役場が土地を買い取ってしまうから移住するにも土地がない」という声が出ていた。

こうしたささやかな認識のズレがあると正しい原因が見つからず発生する課題に対して適切な対応が取れないのではないだろうか。母数が少なく意見のまとまりやすいという桜枝岐村でも小さな認識のズレが生じてしまう。この認識のズレをなくす努力も重視されるべきだが見つかったズレに対しどのように対処していくべきか、そもそもそのズレを自分がどちらかの立場を取ったときに気づけるのか。私のいるゼミでは「住民の立場に立って考える」ということを第一に考えているが同じコミュニティ出身の人間同士で対立することもあるということを思い知った。立場を取った時に相手との認識のズレが何なのかを正しく判断することが最も難しい課題の一つに思われる。